

十二 漢詩で殺される

他人の詩を参考にする例は中国にもたくさんある。

初唐の詩人、劉廷芝^{りゅうていし}は作詩に苦吟^{くぎん}していた。

「今年花落ちて顔色改まり、明年花開きて復た誰か^ま在る」の二句を思いついたがこの句はなんだか不吉な感じがするとつぶやき、頭をひねっているうちに、「年年歳歳、花相似たり、歳歳年年、人同じからず」を得た。これもまた、前の不吉な句と似ているとは思ったが、あまりにも良い句なので、両方の句をとみに生かして有名な次の七言古詩を作った。

「代悲白頭翁」

(白頭を悲しむ翁に代わりて) 劉廷芝

洛陽城東桃李花

洛陽城東桃李の花

飛來飛去落誰家

飛び来たり飛び去りて誰が家にか落つ

洛陽女兒惜顔色

洛陽の女兒顔色を惜しみ

行逢落花長嘆息

行く行く落花に逢いて長嘆息す

今年花落顔色改

今年花落ちて顔色改まり

明年花開復誰在

明年花開きて復た誰か^ま在る

已見松柏摧爲薪

已^{すで}に見る松柏摧^{くだ}かれて薪^{まき}となるを

更聞桑田變成海

更に聞く桑田^{そうでん}の変じて海となるを桑田^{そうでん}くわ畑、時勢が変わる例え

古人無復洛城東

古人復た^ま洛城の東に無く

今人還對落花風

今人還^また對す落花の風

年年歳歳花相似

年々歳々花相似たり

歳歳年年人不同

歳々年々人同じからず

(以下十四句は省略)

この詩には後日譚がある。劉廷芝は同じく初唐の宮廷詩人であった宋之問^{そうしもん}の女婿(劉の妻の父)であり、詩を舅^{しゅう}の之問^{しもん}に見せたところ、之問は「年々歳々・・・」の一連の句を大いに賞賛し、「ぜひ譲ってほしい」と頼んだ。他ならぬ舅の頼みなので、廷芝は仕方なく一度は承知したが、後日、惜しくなったので、結局は譲らずに自作の詩として発表してしまった。約束を破られた上に恥をかかされた之問は怒り、下僕に命じて廷芝を土囊^{つう}で圧殺させてしまい、これを自分の作としたという。

廷芝が初めに不吉な予感を感じた通り六句目の「明年花開きて復た誰か^ま在る」と詠んだのが、計らずも自分の身の上となった。詩ができて一年もたたないうちに殺されたわけである。この話は、唐の詩人の詩句の表現に対する執念がひしひしと伝わってくる。この話は元代の「唐才子伝」による。

宋之問集には「思う所有りて」と題してこの詩が載っており、古文真宝にも、日本の和漢朗詠集にも、作者を舅^{しゅうと}の宋之問としている。しかし唐詩選には、劉廷芝の作として載っている。

劉廷芝は琵琶の名手で、美男の誉れ高かったが素行が悪く、終生官位につけなかった。唐詩選には盛唐の岑参の作として同じ境地をうたった詩句がある。題は「韋員外家花樹歌」で、「今年の花は去年に似て好し去年の人は今年に到って老ゆ、始めて知る人は老いて花に如かざるを」である。

「漢詩故事辞典寺尾善雄河出書房新社」

この宋之問の略伝を「唐詩三百首東洋文庫」でみると、権力にへつらい媚びる人物で、贈賄、密告をするなど、まことにいやしむべく、当時の人から指弾されていたが、五言律詩・五言排律の完成者として、まことにすぐれていた、とある。彼は武則天時代の寵臣だが、睿宗^{えいそう}即位後、欽州（江西省）に流され、その後いったん中央に復帰して修文館学士に任ぜられたが、考試官となって賄賂を受けたことが発覚して越州長史（補佐役）に左遷され、玄宗の即位した年に自殺を命じられた。六十五歳であった。

十三 傑作の漢詩とは

清朝初期の詩人王士禛^{おうししん}（漁洋）は唐の七言絶句の最高傑作は、次の四首としている。

王之涣^{しかん}の「涼州詞」、李白の「早發白帝城」、王昌齡の「長信秋詞」の五首連作中の「掃葉奉じて平明金闕開く」の一首、そして王維の「送元二使安西」である。

唐詩選の編者とされる李攀龍^{はんりゅう}は、王昌齡の「出塞」（從軍行三ともいう）が最大の傑作であるとしている。そしてその起句を絶賛している。つまり、秦時明月漢時関という一句である。「唐詩撰下前野直彬岩波文庫」明の王世貞は、唐詩絶句の最も優れたものは王翰^{おうかん}の「涼州詞」としている。明の胡應麟は、古今の七言律詩の中で杜甫の「登高」にかなうものは無いと評している。

また、石川忠久先生が著書「漢詩鑑賞辞典」に約四百首の名作を載せているが、「傑作」と表現しているのは、以下の十六詩である。

「涼州詞」 りょうしゅうし	辺塞詩の最高傑作の一つ	王翰	七言絶句
「閨怨」 けいえん	閨怨詩の傑作	王昌齡	七言絶句
「出塞」	唐代の五大絶句、起句は絶唱とされる	王昌齡	七言絶句
「送元二使安西」	送別詩の代表	王維	七言絶句
「黃鶴樓送孟浩然之広陵」	送別詩の絶唱	李白	七言絶句
「早発白帝城」	古来、李白の傑作とされる	李白	七言絶句
「秋浦歌」 しゅうほ	千古の絶唱	李白	五言絶句
「送友人」	送別詩の代表と称される	李白	五言律詩
「旅夜書懷」	人によく知られた傑作。見事な作である	杜甫	五言律詩
「登高」	明の胡應麟は古今七律の第一と賞讃	杜甫	七言律詩
「磧中作」 せきちゅう	辺塞詩の名編	岑参	七言絶句
「夜上受降城聞笛」	中唐期の七絶の傑作	李益	七言絶句
「江雪」	超俗の名吟とされる	柳宗元	五言絶句
「楽遊原」 かいう	五言絶句の傑作	李商隱	五言絶句
「薤露歌」 かいろう	挽歌の代名詞として定着している	無名氏	雜言詩
「蒿里」 こうり	薤露の歌と並んで挽歌の傑作	無名氏	七言古詩

この中からいくつか紹介しよう。

「涼州詞」
りょうしゅうし（涼州詞）王翰
おうかん

葡萄美酒夜光杯
欲飲琵琶馬上催
醉臥沙場君莫笑
古来征戰幾人回

ぶどう やこう 葡萄の美酒夜光の杯夜光杯もよお 白玉の杯
飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す琵琶な 西域の樂器
酔うて沙場に臥すとも君笑うこと莫かれ沙場さばう 沙漠
古来征戰幾人か回かえ

「送元二使安西」
げんじ あんせい（元二の安西に使いを送る）王維
おうい 元二元は姓、二番目の男

渭城朝雨浥輕塵
客舍青青柳色新
勸君更尽一杯酒
西出陽関無故人

いじょう 渭城の朝雨輕塵を浥す うらお 渭城かんよう 長安の渭水の向かい側の咸陽
すす 客舍青青柳色新たなり
君に勸む更に尽くせ一杯の酒
西のかた陽関を出ずれば故人無からん 故人友人

「江雪」

(江雪) 柳宗元

千山鳥飛絶

千山鳥飛ぶこと絶え

萬径人蹤滅

万径人蹤滅す

孤舟蓑笠翁

孤舟蓑笠の翁蓑笠Ⅱみのがさ

独釣寒江雪

独り釣る寒江の雪

作者の柳宗元は当時、順宗（唐の十代皇帝）の信頼を得て中央での政治改革に取り組んでいた。内には宦官の勢力を弱め、外には地方の藩鎮・節度使の横暴に対する中央制御権の回復を意図したものである。しかし宦官と守旧派が連合して憲宗（順宗の長子）を皇帝として推戴したため、病身の順宗はわずか八カ月で退位して憲宗が即位した。これで改革は挫折し、柳宗元は湖南省零陵県に左遷された。この永州は南方の野蛮の地で異民族が雑居し、風土病も蔓延する文化果てるところであった。白銀の世界の中で、じっと石のように動かぬ漁翁は、迫害をはねのける詩人自身の清冽な姿であり、孤独と失意に耐え抜かんとする作者の強靱な精神の表れであろう。

「唐詩歳時記植木久行講談社学術文庫」

柳宗元は左遷された地で永州司馬を十一年間勤め長安に戻されたが、その一か月後に柳州刺史（長官）として追放される。ここは永州より更に辺鄙な地で、ベトナムの近くである。ここで四年間勤め、長安に戻ることなく卒した。四十七歳であった。

日本人の漢詩を一つ紹介しよう。

「冬夜讀書」

(冬夜讀書) 菅茶山

雪擁山堂樹影深

雪は山堂を擁して樹影深し

檐鈴不動夜沈沈

檐鈴動かず夜沈々

閑収乱帙思疑義

閑に乱帙を収めて疑義を思う

乱帙Ⅱ取り散らかした書籍

一穗青燈萬古心

一穗の青灯万古の心

燭台の火を見つめるうちに、昔の聖賢の心のうちの疑問が解ける。寒い静寂の中に集中してゆく精神を巧みに表現している。石川忠久先生は、「この結句はすごい、千古の絶唱ですね」と語っている。

◆詩の大家とは

中国人から見て詩の大家はだれであろうか。

清の乾隆帝（一七三六～七五在位自身は四万首を越す詩を作っている）は詩の大家は六人であるとした。つまり唐の李白、杜甫、韓愈、白居易の四人、宋の蘇軾と陸游の二人である。

その詩を選んで「唐宋詩醇」を編した。その凡例にいう、「唐宋の人、詩を以って鳴るものその数は数えきれない。その卓然として名家（世に知られる人）なる者、なお数十人を下らない。

ここに独り六家を取る者は、おもうに惟だ、これのみ大家（特にすぐれた人）と称するに足れり。大家と名家とは、なお大将と名将とのごとし。その體段（起承転結）正に自ずから同じからず」と。

その大家の蘇軾が陶淵明の詩を評した有名な言葉がある。

「吾れ詩人に於いて甚だ好むところなし、独り淵明の詩を好む。淵明、詩を作ること多からず、しかれどもその詩は質にして実は綺、瘦せていて実は腴。曹（植）、劉（楨）、鮑（照）、謝（朓）、李（白）、杜（甫）の諸人、みな及ばざるなり」

淵明の詩は一見地味のようであるが実は華麗、瘦せているようであるが実は脂ぎっている、というのだ。そして李白、杜甫以上だと言うのである。「中国詩史吉川幸次郎ちくま学芸文庫」

その陶淵明の詩を一種示す。

「飲酒」

（飲酒）陶淵明

結廬在人境 而無車馬喧 廬を結んで人境に在り 而も車馬の喧しき無し

問君何能爾 心遠地自偏 君に問う何ぞ能く爾と 心遠ければ地自から偏なり

采菊東籬下 悠然見南山 菊を東籬の下に采り 悠然として南山を見る

山氣日夕佳 飛鳥相與還 山氣日夕に佳く 飛鳥相与に還る

此中有真意 欲辨已忘言 此の中に真意有り 弁ぜんと欲すれば已に言を忘る

ほかにも、清の沈徳潜は、唐の五言絶句の名手三人を挙げ、王維の自然、李白の高妙、韋応物の古淡、と評している。

十六 中国の王朝と詩人たち

唐の三百年は漢詩の最盛期で、唐詩は中国文化の華と呼ばれる。中国の詩を日本人は漢詩と呼びならわしている。漢詩、漢文という言い方は日本独特の表現です。漢は唐の八百年前の王朝である。漢詩と言うと中国では漢代の詩と思われるらしい。唐詩と区別されるようである。

中国の詩はおよそ三千二百年前の昔に詠い始められ、ずっと遅れて日本の万葉集や源氏物語を始め文学、絵画、書道、詩吟など、多くの精神文化に影響をあたえてきた。北方の詩経（中国最古の詩集）、南方の楚辞（屈原とその弟子の詩集）から唐になって、定まった詩の形式ときまりができたと言われている。次頁に、中国の歴代王朝と有名な詩人の活躍した時代を示す。長命な詩人は賀知章（八五）、白居易（七四）、陸游（八四）などで数少ない。

◆唐代詩人の出身地

唐代の代表的な詩人の戸籍をみると、圧倒的に北人が多いことがわかる。北人、南人というのは、南北朝期の版図を基準に分けた呼び名である。

李白は西域で生まれ、五歳で四川に移ったが祖先は隴西（甘肅省）の人で、とうぜん北人である。杜甫は襄陽出身で北朝の版図にはいる。孟浩然も襄陽出身であった。王维、王昌齡、柳宗元は山西、白居易と杜牧は陝西、劉禹錫、韓愈、賈島は河北である。河南は杜甫のほかに、李賀、元稹、李商隱たちがいる。

唐詩選に作品を収録された詩人は百二十八人にのぼり、南人は僅に二十数人にすぎない。その中でやや名の知られた人は、江蘇の陸龜蒙、浙江の駱賓王、賀知章、広東の張九齡でいどであろう。そもそも唐王朝そのものが、随につづいて北朝系の政権であったのだ。

宋代になると代表的詩人の分布は逆転してしまう。蘇軾兄弟は四川であるが、梅堯臣、欧陽脩、王安石、黄庭堅、陸游、朱熹など、ことごとく南人である。淮河以北の人といえば司馬光くらいである。

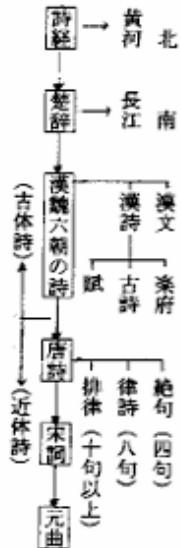
よく言われるが、唐詩は骨格のがっちりした、豪放、雄渾、主情的という特徴をつのに対して宋詩は繊細、緻密、主知的である。これは時代精神による差もあるが、出身地の差もあったとおもう。唐詩は北人的であり、宋詩は南人的ともいえるのだ。

「唐詩新選陳舜臣新潮文庫」

吉川幸次郎は唐詩は酒、宋詩は茶、と言い表している。

漢詩の歴史

日本	北狄	時代	年数	都京	争乱	創始者	詩人など
縄文	伝説時代 (二皇五帝)	夏 殷 西周	1020 770 403	洛陽	五覇の抗争 戦国の七雄	堯・舜 禹 湯王 武王 平王	○詩経(最古の詩集・五経の一つ) 孔子 ○楚辞 屈原 孟子 項羽
弥生	匈奴	前漢 新漢	206 221	咸陽	陳勝呉広乱	始皇帝	項羽
倭奴国	三國(魏・蜀・呉)	蜀	220	長安	赤壁の戦	劉邦(高祖)	蘇武 李陵 武帝 司馬遷 司馬相如 ○史記 王逸 (仏教伝来)
邪馬台国	西晉	東晉	280	建業	黄巾の乱	王莽 劉秀(光武帝)	何晏 阮籍 嵇康 曹操 曹植 竹林七賢 王羲之 陶淵明 謝靈運 謝朓 庾信
大和	南北朝	北朝 北魏 北齊 北周 東魏 西魏 南朝 宋 齊 梁 陳	420 280 220	洛陽	赤壁の戦	司馬炎(武帝) 司馬睿(元帝)	謝安 謝玄 謝安 謝朓 庾信 ○文選
奈良	唐	隋	618	長安	安史の乱 黄巢の乱	楊堅(文帝) 李淵(高祖)	初唐 王勃 駱賓王 楊炯 陳子昂 盛唐 李白 杜甫 王維 阿部仲麻呂 高適 孟浩然 岑參 王昌齡 韋應物 中唐 白居易 元稹 韓愈 柳宗元 李賀 杜牧 李商隱 晚唐 杜牧 李商隱 李煜 歐陽脩 王安石 蘇軾 黃庭堅 陸游 范成大 楊万里 朱熹 耶律楚材 元好問 文天祥 ○三體詩
平安	五代	宋	907	汴京	靖康の難	趙匡胤	高啓 王陽明
鎌倉	金	南宋	1127	臨安	紅巾の乱	忽必烈(世祖)	王士禛 龔自珍 黃遵憲 ○全唐詩 ○詩経 最古の詩集(春秋中期まで) ○樂府 音楽に合わせて歌われた。 唐以降、題を借りて作られた詩。 漢・魏・南北朝の詩。 押韻・平仄・句数などの規則がゆるい。 韻を踏むが、詩と散文の中間。
室町	女真	明	1368	北京	土木の変	朱元璋(太祖)	○詞 韻を踏むが、詩と散文の中間。
江戸	清	清	1644	北京	白蓮教乱 阿片戦争 太平天国乱 日清戦争 辛亥革命 五四運動	世祖(順治帝) 孫文(臨時大總統) 毛沢東(首座)	漢文 樂府 絶句(四句) 漢詩 古詩 律詩(八句) 排律(十句以上) 漢詩 六朝の詩 唐詩 宋詞 元曲
明治	大正	昭和	1911	東京	五四運動	孫文(臨時大總統)	漢詩 六朝の詩 唐詩 宋詞 元曲
平成	昭和	平成	1949	東京	五四運動	毛沢東(首座)	漢詩 六朝の詩 唐詩 宋詞 元曲



十七 官職と九品

官品を持つものが職事官につくことができる。官吏の等級を九等に分け、さらに一品から三品は正・従の二つに分けられ、四品以下には正・従・上・下の四階級からなる。つまり一品から九品まで三十階級からなる。この他、実務と関係のない栄典的なものとして、爵（王・郡王・国公・郡公・県公・県侯・県伯・県子・県男）、および勲官（上柱国・柱国・上護軍・・・武騎尉）がある。（日本は品といわず「位」を用いて取り入れている。正一位とか従三位などの等級である）

科挙が実施される前の漢の時代には九品官人法の制度があった。これは地方の郡や州に中正官という役人を置き、人物の才徳を調査してその推薦によって、朝廷が官位を与えるので貴族や有力者ばかりが任命されていた。（しかし隨の時代に科挙の制度が確立した）中央官庁の文官の職場は、三司・三公・六省・九寺・一台・五監がある。三司・三公は正一品で、品は高いが漢の時代のなごりで実務も官庁もなく、常設ではなく名誉職である。

六省は政治の中枢である中書・門下・尚書の三省と宮内官の秘書・殿中・内侍の三省からなる。

「三省」

「業務」

「長官」

「次官」

中書省（右省）

詔勅の立案、皇帝の秘書

中書令（正二品）

侍郎（正四品）

門下省（左省）

詔勅政令の審議

侍中（正三品）

侍郎（正四品）

尚書省

政令の実施

尚書令（正二品）

僕射（従二品）

尚書六部りくぶ

尚書（正三品）

侍郎（正四品次官）

郎中（従五品 司の長官）

右僕射（従二品）

兵部尚書

国防・治安

刑部尚書

法務

工部尚書

建設・営繕

左僕射（従二品）

吏部尚書

官吏人事

戸部尚書

経済・財務

礼部尚書

教育・儀礼

六部の長官は尚書といい大臣級である。六部の下にそれぞれ四司、合計二十四司があり、その長官を郎中（従五品上）という。左僕射は日本では左大臣の唐名である。

「省」	「業務」	「長官」	「次官」
秘書省	蔵書・曆・祭文	監（正三品）	少監（従四品）
殿中省	宮中	監（従三品）	少監（従四品）
内侍省	後宮	内侍（正四品）	内常侍（正五品）
御史台	官吏の監察	太夫（従三品）	中丞（正五品）
九寺	六部尚書の下で実務	卿（正三品・従三品）	少卿（従四品）
五監	（国子・少府・軍器・将作・都水）	国子監祭酒（従三品）	司業（従四品）

御史台は檢察（日本は彈正台）である。長官を大夫、次官を中丞、その下に侍御史（従六品下）、殿中侍御史（従七品上）、監察御史（正八品で地方の監察）があった。九寺は長官を卿（太常寺のみ正三品、ほかは従三品）、次官を少卿という。（九寺は貴族のための伝統的官庁で廃止の断行ができず、屋上屋を重ねる組織となっていた。仏教の寺院とは無関係である。隋唐以前は六部の機能を果たしていたが、隋唐以後は六部の下で細務の執行機関となった）

◆地方行政は、

府（京兆・河南・太原の三府や占領地行政には都護府があった）、
州（三百余）
県（千五百余）

それぞれに多くの官があり、州の長官は刺史または牧という。（上州は従三品、中州は正四品上、下州は正四品下、州を都と呼ぶときは長官を太守という）刺史の馬車は五頭立てと定められていたので、五馬は刺史を意味する。六頭立ては天子である。州の下県の長官は令（正五品上から従七品上まである）という。

武官は中央に十六衛（他に左・右羽林軍）、地方に折衝府（約六百）の官があった。

◆九品以上の官人になると、税金が免除され、五品以上は同居親族の税金免除と官人永業田の給付、蔭（子・孫・に官人になる資格が与えられる）などの特権があった。朝廷に着る服の色は、階級で区別されていた。

三品以上は紫、四・五品は緋または朱、六・七品は緑、八・九品は青または碧と決められていた。黄色の服は宦官、道教僧などが着た。また天子の象徴である袍は黄色である。

◆先に述べた三省は政治の中心であるので、もう少し見てみよう。

尚書省は門下省の出す政令の**実行機関**である。

長官は尚書令。次官は左・右僕射の二人で六部を分担した。

門下省は**中書省**の決定した政策をここで審議する役である。（左は門下省、右は中書省のこと）

門下省は貴族の牙城であった。長官は侍中といい、貴族出身者が任ぜられた。侍中じちゅうの下に諫議大夫かんぎがあり、これが則ち諫官であって、のちさらに拾遺しゅうい、補闕ほけつの官を増やした。

このほかに門下省には給事中があり、天子の詔勅を中書で作成してもこれを拒否する権があった。一言でいうと、門下省は天下の世論を代表する機関である。その判断のよりどころは儒教の精神に他ならない。古今変わることもない中国的正義を主張する機能をもっていた。

漢のはじめまでは皇帝の秘書官の業務を貴族の三公がおこなっていたが、後漢の光武帝のころから三省六部が立案と執行を総括する形になった。いいかえれば天子といえども、手続きを経なければ主権を行使できない。同時に天子はその責任を官僚と分かち合うことになった。これが唐王朝の命脈を長く保たしめた一つの原因である。

また最高政策の決定は三省の宰相の合議でなされた。宰相は、三省の長官のことであるが、尚書令は最初、太宗（李世民）が皇太子時代にこの位にあったので、その後は尚書令を任命しないことになった。したがって、中書令と門下省の長官である門下侍中（各二員）が正宰相である。尚書省の令は任ぜられず、次官二人が統轄した。つまり左・右僕射ぼくや（または丞相じょうそうともいう）である。この二人は正宰相として加わっていた時期と加わらない時期がある。この宰相会議を政治堂とか中書門下という。

三省のほかに、秘書省、殿中省、内侍省（禁中・後宮を司る、宦官によって運営）があった。なお、時代に伴う律令官制の臨時的な補正は、「使」の職を設置して行われた。節度使、採訪使（地方官吏の監察）、転運使（地方から財賦を京に運ぶ）、塩鉄使（塩・金属の採鋳）、度支使たくし（会計）などがそれである。これは皇帝の直属機関として宮廷内部におかれたので、尚書省の仕事と重複することになった。そして宦官が入り込むことにもなった。

◆**宰相**とは、天子の補佐、官僚の統率をする最高位の官であるが、時代によって名が異なる。宰相のよび名は唐から始まり、それ以前は丞相と呼んでいた。つまり秦では丞相といい、前漢でも丞相（大司徒）であった。後漢では尚書令（司徒）のこと、唐では中書令・侍中・僕射ぼくやを宰相とよんだ。宋では同中書門下平章事、明では内閣大学士、清では大学士のことである。

◆**員外郎**とは（従六品上）、例外的に皇帝に直接任命される勅授官で、定員外に設け

ちよくじゅかん

た官。皇帝出御の朝礼に常に参加が許される常参官としてエリートコースにある。官庁に一名ずつの枠があった。この官から地方に転出時には刺史（州の長官・正四品）となるほどのポストである。令外の官である地方の節度使やその属官は、朝廷の正式官制に位置付けされておらず、官品が無い。そこで、中央官の何らかの肩書が与えられた。

◆**秘書監**（三品）とは文書や図書を管理し、祭文、墓誌などの起草、暦を作成する役所の長官のことである。賀知章（詩人・書家）の辞任した何年か後に、阿倍仲麻呂や藤原清河が就任した。

◆**官僚の俸給の一部は金銭で受け取るが、玄宗の晩年のころ、一品官は毎月二十四貫文（貫は千文）、九品官は千九百文であった（一品の十三分の一）。米価は一升二文という時期であったから、品官は幸せな生活ができたという。韓愈は任官できなかった時、何年間は地方節度使の属官となっていた。給料は節度使の財布から私的に支払われていたので、生活は楽ではなかったと言われている。**

十八 詩人と官品

隋の時代から科挙がはじめられたが、その目的は政界に根を張った貴族の権力を下げて、皇帝の権力が最上最高なることを示すためであった。その前の六朝分裂時代から皇帝といえども貴族を抑えられなくなっていた。つぎの唐はこれを受けつぎ、科挙をもって社会層から官僚を採用するための道を広げていった。

玄宗の治世には、宰相になったもの三十一人のうち、進士は十一人で約三分に一を占めるにすぎなかったが、つぎの憲宗のときは、宰相二十五人のうち進士が十五人、半分以上となった。しかし、貴族、大臣、大将、高官らの子供は父の威光によって官につく権利はまだ持っていた。貴族のつてである。皇帝としては科挙の官僚が増える傾向こそ、望むところであった。貴族政治を改めるため官僚制度という大きな網をめぐらし、そこに平民の官僚を入れることによって、世襲貴族の権利やつてを皇帝が制御して皇帝権力を高めていったのである。科挙出身の役人は詩の才能と儒学思想をもち併せていた。詩の力が出世と関係はないと思うが、詩人の官職を「唐代百官表」に当てはめてみると、次表のようになる。

李白や杜甫は偉くはならなかった。高官になったのは元稹、韓愈、白居易、蘇軾、王安石である。

【次表は本人の最高位の職位であり、退職直前に与えられる肩書も含む。白居易は刑部侍郎（正四品法務次官）のとき、政争に嫌気がさして、自ら希望して閑職の太子少傅（しょうふ）となり、洛陽の皇太子付の役のとき、退職を希望して、七一歳で刑部尚書（法務大臣正三品）の肩書を与えられ退職した。退職後の年金は俸給の半分が与えられた。このほか、降格・左遷があるから最後までこの地位にいたわけではない。しかし退官した人や死んだ人は、在職中の最高位で呼ばれることになっている】

	六朝～初唐	盛唐・中唐	晩唐	宋～清
一品	曹植（陳王）庾信（開府儀同三司）			李煜（南唐最後の皇帝）
二品	江総（尚書令）沈約（梁・尚書令） 陸士衡（大都督）	李紳（右僕射）張九齡（中書令） 張敬忠（節度使）嚴武（節度使）	高駢（節度使）令狐楚（節度使）	王安石（左僕射=宰相）司馬光（左僕射） 耶律楚材（中書令）趙孟頫（翰林学士承旨）
三品	魏徵（侍中）李嶠（中書門下） 郭震（吏部尚書） 顔延年（秘書監） 謝靈運（秘書監・侍中） 王粲（侍中）顔師古（秘書監） 阮籍（散騎常侍=長官） 虞世南（秘書監）	阿倍仲麻呂（秘書監）元稹（平章事） 賀知章（秘書監）張説（中書令） 戴叔倫（経略史）高適（刑部侍郎） 白居易（刑部尚書）李益（礼部尚書） 劉禹錫（太子賓客）賈至（右散騎常侍） 蘇頲（礼部尚書）賈曾（礼部侍郎） 武元衡（宰相）顔真卿（吏部尚書）	韓愈（国子祭酒=国立大学総長） 薛逢（秘書監） 韋莊（後蜀・宰相）	蘇軾（礼部尚書）王陽明（兵部尚書） 蘇轍（大中太夫） 馬祖常（礼部尚書） 王士禎（刑部尚書） 吳偉業（国子祭酒） 晏殊（同中書門下平章事=宰相）
四品	丘爲（太子右庶子） 謝朓（尚書吏部郎・太守） 陸凱（左丞相）	王維（尚書右丞）韋応物（刺史） 劉長卿（刺史）張謂（礼部侍郎） 岑参（刺史）戴叔倫（経略史） 柳宗元（刺史）沈佺期（太子少詹事） 裴迪（刺史）	韓偓（兵部侍郎）雍陶（刺史） 張籍（国子司業=大学副総長） 許渾（刺史）杜牧（中書舍人・刺史） 秦韜王（工部侍郎） 姚合（秘書少監）	文天祥（右丞相）范成大（参知政事） 欧陽修（参知政事=副宰相） 錢謙益（礼部右侍郎） 高啓（戸部右侍郎）陳与義（参知政事） 陸游（通判=副知事、軍器少監）
五品	嵇康（中散太夫）王籍（中散太夫） 沈佺期（中書舍人） 孟嘉（長史）宋之問（修文館学士）	司空曙（郎中）楊巨源（礼部郎中） 顧況（著作郎）韓翃（中書舍人） 李白（翰林供奉）錢起（翰林学士）	李商隱（工部郎中）張継（檢校祠部郎中） 王建（司馬） 鄭谷（郎中）羅隱（司勳郎中）	陳子龍（給事中）梅堯臣（国士博士） 楊万里（州知事・丞） 曾鞏（中書舍人）顧炎武（郎中）
六品	陶淵明（県令）駱賓王（侍御史） 杜審言（著作佐郎）何遜（郎） 謝玄暉（吏部郎）	杜甫（工部員外郎）王翰（駕部員外郎） 廬僊（吏部員外郎）崔顥（太僕寺丞）	王建（司馬）廬綸（県令） 温庭筠（国子助教）	袁枚（知県） 薩都喇（侍御史）袁宏道（知県）
七品	鮑照（参軍）皇甫冉（右補闕）		皮日休（太常博士=宮廷の儀礼係）	元好問（尚書左司都事）
八品	謝恵連（参軍）陳子昂（右拾遺）	賈島（倉参軍）王昌齡（参軍） 張子容（尉）耿渚（左拾遺）		黄庭堅（国史編纂官）龔自珍（礼部主事）
九品	王勃（参軍）	李賀（奉礼郎）王灣（尉）孟郊（尉） 常建（尉）王之渙（主簿）	曹松（校書郎）	李夢陽（戸部主事）

◆日本では、隋の律令制度（律は主に刑法令は行政にかかわる法）を学んできた。さらに隋のように仏教によって国を治めようと寺院を建てることを進めた。六〇〇年の第一回遣隋使が隋の文帝に朝貢したときに、日本国（倭国）にはまだ官人の位階が整っていないと指摘されて、国家としての地位を認められなかったという失敗があった。そのため、六〇三年、聖徳太子、蘇我馬子らによって冠位十二階を制定した。冠名は儒教の徳目を参考にして徳・仁・礼・信・義・智の各々に大小をつけた。各冠の衣の色は紫青赤黄白黒の六色を各々濃淡で区別して十二階とし、高官の衣服は中国風のスカートにした。聖徳太子は蘇我馬子の娘婿であり、推古天皇を叔母とする。第二回の遣隋使は六〇七年、小野妹子が二代皇帝の煬帝に朝貢して、この時から国として認められ翌年、隋から日本に使節が来たのである。

◆官位に関する話を一つ。

岳父というと、妻の父のことである。

唐の玄宗皇帝が泰岳（泰山ともいう）で封禅（天子が天地を祀る大典）をするとき、その儀式一切を取り仕切る責任者である封禅使に中書令（上位の宰相）の張説を任命した。この張説に九品官の娘婿があった。九品は最下位の品官である。

張説が封禅使になると娘婿は一举に五品官に昇進した。

玄宗が怪しんで臣下に問うたところ、これは泰岳のおかげですと答えた。

つまり岳父とは、婿の異例の昇進を認めさせるほどの「実力ある偉大な」妻の父という意味である。

十九 後宮にも官位があった

皇帝は皇后を一人もつが、後宮には大勢の宮女がいて独り占めできた。後宮の女性には序列と官位があった。左に周代に始まり、のちの王朝もこれにならった后妃制度を示す。

・一皇后

・四夫人 貴妃、淑妃、德妃、賢妃 正一品 （例として楊貴妃、蕭淑妃）

・九嬪 昭儀、昭容、昭媛 正二品 （例として趙昭儀・合德）

修儀、修容、修媛

充儀、充容、充媛

・二十七世婦 婕妤 正三品 （例として漢の班婕妤）

美人 九人 正四品 （例として楚の虞美人）

才人 九人 正五品 （武照則天武后のち昭儀・皇后になる）

・八十一御妻 宝林 正六品

女御 二十七人 正七品

綵女 二十七人 正八品

宮女の最大の願いは、天子の寵を得て皇子をもうけることである。夫人は宮女の最高位であるが、その上に皇后がいて本妻として皇帝に仕えるわけである。これら全部の定員は百二十である。皇帝の寵愛の度が高くなると昇格した。皇帝が死ぬと、宮女は寺に送られるのが常だった。また、後宮にも牢獄があり、漢代にはこれを永巷と呼んだ。

漢代における女官の十四等といわれるものは、昭儀・婕妤・義娥・俗華・美人・八子・充依・七子・良人・長使・少使・五官・順常・無涓となつてゐる。

「姫」もまた官名で、単なるお姫さまでなく、順位は婕妤と八子の間にあるらしい。したがって虞美人のことを虞姫ともいう。

唐代の女官十九等は、貴妃・淑妃・德妃・賢妃・昭儀・昭容・昭媛・修儀・修容・修媛・充儀・充容・充媛・婕妤・美人・才人・宝林・御女・采女となっている。

◆則天武后はもともと武照という名で、十四歳で後宮に入り唐の太宗に才人として仕え、八年目の太宗の死後は出家させられて尼僧となつていた。

皇太子が二十二歳で即位し高宗となると、父の後宮にいたときから見知っていた武照を宮中に戻し昭儀とした。昭儀は正二品のトップである。高宗の皇后王氏には子が生まれなかったので、高宗は皇后の廃位を望んでいずれ武氏を皇后にしたいと思つてゐた。尚書右僕射の褚遂良は、武氏の皇后の冊立に反対をした。その理由は、儒教的思想で、「先帝に仕えた女官を息子が奪うことは、衆人天下が知れば、陛下のことを何と考えるでしょうか」と反抗したため、ベトナムの北に左遷されその土地で三年後に死んだ。

王皇后は蕭淑妃と組んで、武氏の排除を画策したが、逆にともに位を剥がされた。武氏は男子を生み続いて女子を生んだので、昭儀からついに皇后となった。その後、高宗が卒中となり、武皇后が政務を行った。高宗が没すると、傀儡皇帝の睿宗を皇太子に降格して自ら聖神皇帝と称した。中国歴代のただ一人の女帝であり、一時唐を周という国名にした。

「新十八史略五駒田他河出文庫」

則天武后はいわゆる権謀術策を尽くして、権力を手に入れた恐るべき女性であるが、政治家としては大変有能で、男まさりの決断力があつた。摂政の時期を入れると四十五年間にも及ぶその治世の間に、唐の国勢はいつそう発展した。

科挙出身の官僚を積極的に登用したことは注目すべきである。さらに、科挙の試験に、詩と賦（句末に韻をおく散文、対句を駆使した美文）という二種の韻文を課した。それまでの試験は儒教の經典と政治問題（策という）の散文題であつたが、新たに詩と賦が加わつて三本立てとなり、このうち詩が最も重んじられた。唐代もこれによって詩がますます発展し、

詩作が知識人の必須の教養となる。「漢文・唐詩・宋詞・元曲」と言われる通り、唐代は言語文化が最も発展した時代であったため、実におびただしい詩が作られた。

「唐詩村上哲見講談社学術文庫」

◆日本においては十代八人の女帝がいる。数字が二つ合わないのは、一人で二回即位している人がいるためである。天智・天武両天皇の母皇極天皇（三五代）が再び斉明天皇（三七代）となり、弓削の道鏡を寵愛した孝謙天皇（四六代）が再び称徳天皇（四八代）となったためである。古くは神話時代の天照大神は伊弉諾尊の娘である。天照大神の孫の瓊瓊杵尊の曾孫が、第一代の天皇（神武天皇）である。令和の今上天皇は一二六代である。

◆玄宗の開元年間、外征が盛んであった。宮女が綿入れの服を縫い、それを出征軍人に賜うのがしきたりになっていた。ある軍人が、いただいた恩賜の服のなかに、詩を書いた紙片を発見した。それは次の詩である

「袍中詩」

（袍中の詩）

沙場征戍客

沙場征戍の客

寒苦若為眠

寒苦若為にしてか眠らん

戰袍經手作

戰袍手を経て作る

戰袍Ⅱ軍衣

知落阿誰辺

知んぬ阿誰の辺にか落つる

蓄意多添線

意を蓄え多く線を添え

含情更著綿

情を含み更に綿を著す

今生已過也

今生已に過ぎたる也

願結後生縁

願わくは結ばん後生の縁

この紙片を発見した兵士はそれを上官に報告した。上官は朝廷にこの事を奏上し玄宗皇帝は、全宮廷にこの詩を示したという。恋文を恩賜の戦衣にしのばせるのは、万死に値する行為とみられた。一人の宮女が、おそれながら・・と、自首して出た。いったん宮廷に仕えた女性は皇居の外に出ることも、そとで他の男とあうことも許されない。皇居は宮女を監禁しているようなもので普通の結婚は望めなかった。玄宗は彼女の心情をあわれみ、その詩を得た軍人に、彼女を妻として与え、「朕はいまおまえに今生の縁を結んでやった」と言ったと

いう話が伝わっている。

「唐詩新選陳舜臣新潮文庫」

◆後宮の官品をもつ高位の女性には、お付きの女官、侍女、お針子、下働きがおり、後宮全体の炊事や用度係を含めると女性の数はおびただしいものであった。玄宗の頃は、長安の三宮、皇子十宅院、皇孫百宅院、東都（洛陽）の両院とで、女官の総数は四万人、その世話をする宦官は四千余人いたという。宦官は古くは奄人えんじんと呼ばれ、君主に近侍するものを寺人と呼んだ。

◆明代、皇帝の閹房けいぼうのことを掌る宦官の役所を敬事房といい、その長を敬事太監と称した。つまり皇帝と皇后の夜の交わり専門の役である。皇帝が皇后と交わった場合はその年月日を記録して、受胎の時の証拠とする。お目見え以上の妃嬪ひひんだけでも百人以上いるのであるから、どうしても、帝のお氣に入りは、自ずから限定される。そこで宦官は妃嬪ひひんの名前を記入した縁頭牌という名札を数十枚、銀盤に載せて皇帝の夕食時に料理と共に持参して捧げて指示を待つ。帝にその氣がなければ「下がれ」と言うが、氣があれば中の一枚を取って裏返しにする。その場合宦官の意向が介入することもあり、この妃は体調がよろしからずと言えば指名を変えることもある。

その夜、妃嬪を帝の寢所に送り込む任務が生じる。当の妃嬪ひひんに帝の指名があったことを伝えるとともに、皇后にも伝える。皇后の印を捺した文書がとどく。皇后の地位を形式的にせよ尊重するのであって、皇后が帝の意に逆らうことはなかった。

指名を受けた妃嬪は女官たちに世話をさせ、入浴と化粧をすませる。担当の宦官は、妃嬪の兇器携帯予防のため、裸にして羽毛でつくった袋に包み、背中に負ぶって、帝の寢所に送り込む。袋から出された妃嬪は用意された寝衣に着替えて帝を待つ。このあと、敬事太監と担当宦官は寢所の外で一定時間を待機して、決められた時間が過ぎると声を出して叫ぶ。是し時侯しほう了（時間でございます）。皇帝が応じないとまた同じことを叫ぶ。三度繰り返しても応じなければ、中に遠慮なく入り込んで妃嬪を再び袋に入れて運び出してしまう。もっとも皇后の場合は居たいだけ居ることができた。明代にはじまったこの強制連れ出しは、天子の健康保持のための良い方法として清でも行われた。それを決めたのは康熙帝こうしである。

「宦官物語寺尾善雄河出書房新社」

◆古くは晋の武帝（二六五～二九〇在位）の後宮にはもととたくさんの宮女たちがいたが、呉を征服してその宮女数千人を納れると、ものすごい数になった。武帝お気に入りの宮女だけでも数百人に上り、どの女性のところへ出かけていいか、天子自身にも見当がつかない。一計を案じた天子は羊に曳かせた車に乗り、羊が停まった部屋の宮人のところに泊まることにした。そこで宮人たちは何とかして羊の足を向けさせようと、竹の葉を戸に挿し、地面に塩を置いて、羊車の来るのを待ったという。「晋書」の胡貴嬪伝に見える。

このように宮人が膨大な数にのぼるので、一度でも天子の情を受けた人はまだ幸せな方で、天子の顔さえ見たことがない宮人が多かった。寵を受けた女性でも容色が衰えたとなると、たちまち見捨てられ長く空閨をかこつことになる。唐代ではこういう宮女は、別の宮殿に移されたが、洛陽にある上陽宮はその一つ。特別な場合をのぞいて、死ぬまでそこで過ごさなければならぬ。または道教の安国観（寺のこと）で暮らす女道士は大半が、上陽宮から退いた宮女たちであった。

白楽天の「上陽白髮人」には、そのような宮人の歎きが、四十一句で詠われている。その中に「入時十六今六十」の句が見える。このような女性の苦悩を詠った詩も多い。後宮のことを題材にしているので「宮詞」という名称で呼ばれる。

「後宮詞」

（後宮の詞） 白楽天

雨露由来一点恩

雨露由来一点の恩

雨露Ⅱ恩沢、天子の情け

争能偏布及千門

争でか能く遍く布きて千門に及ばん

争Ⅱどうして

三千宮女臙脂面

三千の宮女臙脂の面

臙脂Ⅱべにおしろい

幾箇春来無淚痕

幾箇か春来りて涙痕無からん

天子のお情け（雨露）はすべての女性に分け与えられることはない。春になれば三千の宮女のおしろいで飾られた顔に涙の痕のない人は何人いるだろうか。という意味である。

◆また、科挙の試験に落第した賈全虚が、宮城のお堀に面して坐っていると、花をつけた木の葉が流れてきた。拾い上げてみると詩が書きつけてある。

一入深宮裏

一たび深宮の裏に入り

無由得見春

春を見得るに由無し

題詩花葉上

詩を花葉の上に題し

寄与接流人

流れに接づく人に寄与せん

全虚はこの詩を手にして、いったいどのような女性かと想像して、その心情を思いやっていると街吏に見とがめられ、事情を聞かれた。全虚がありのままに話すと、街吏から金吾（近衛府の役人）を経て、後日徳宗（九代・賢帝とされる）の耳に達した。感動した皇帝は家臣に命じて調べさせると、その宮女は鳳児ほうじという女性であることが判明した。彼女は不謹慎な行為を犯したと恐れたが、徳宗は咎めるどころか、全虚を召して、金吾衛兵曹の官を授けたうえ、鳳児をその妻として与えたほか、後宮での彼女の持ち物全部を車に乗せて新所帯の費用として贈った。この詩、全唐詩には「徳宗宮人花葉に題する詩」としてある。

「中国の女詩人たち中津濱渉朋友書店」

◆後宮の宮女は昔から、物品と同じで贈答用にされたものである。後宮を取りしきる皇后や太后の意志でどうにでも扱われた。たとえば漢の劉邦の皇后であった呂后は、劉邦の死後、自分の生んだ恵帝を立て、権力をふるい自分の親族を要職に配し、將軍や王侯にして呂氏一族は栄えた。親族の女性までも侯とした。各地の諸王にお中元として、五人ずつの宮女をプレゼントした。北辺の代王（河北省蔚郡の王）は五人のうちの一人を側室とし、四人を部下に与えた。代王の側室となったのは竇氏とうしであった。代王にはむろん正妻がいてすでに四人の息子がいた。竇氏は側室として代王の子を三人生んだ。そのうちに正妻が死んだ。そのため竇氏は正妻になった。そのころ都では、呂氏一族が、斎王である劉氏の乱によって滅ぼされて、皇族会議で代王が後継の皇帝に指名された。

代王は母の薄家は謹直善良であり、妻の竇家とうかは貧困で無力であり、外戚の力が弱かったことが良かったのである。これが皇帝に指名された理由の一つであった。呂氏の横暴を教訓にしたのである。こうして代王は文帝となり、後宮から出された竇氏は皇后になった。この女性の孫が大帝と言われる武帝である。

「小説十八史略陳舜臣講談社文庫」

◆宮女たちの運命として、唐代における宮女解放の史実がいくつかある。主なものは次の通り。徳宗（九代賢帝）のとき、八〇五年三月に、宮人三百人を解放、安国観（道教）の尼寺に移した。同じ月、後宮および教坊（宮中の歌舞音楽教習所）の妓女六百人を解放、肉親縁者に迎えられた。憲宗（十一代）のとき、八一三年、二百台の車に乗れる数の宮人を解放、嫁入りも希望に任せた。穆宗（十二代）のとき、八二四年、後宮および内園（宮中の御園、禁園）に没入（家族が罪にふれたその妻妾や娘を奴隷として宮中に入れること）されている者を解放、行く先は希望に任せた。敬宗（十三代）のとき、八二六年、宮女三千人を解放、嫁入りするも近親に身を寄せるも自由に任せた。また、このほかに天子の死後も、その配偶者

の資格で一生涯、天子の墓所のお守りを命ぜられる人たちもあった。これがいわゆる、「陵園妾」もしくは「奉陵宮人」である。

南京にある明の太祖朱元璋の孝陵には、従葬の嬪妃は四十六人であるという。明の太祖は病が重くなってきた、看病する妃たちに殉死をしてくれるよう説得した。彼女たちはその要請を敬意を以って受けた。本当は死にたくなかったので躊躇して大臣たちに生かしてほしいと泣いて訴えたが取り上げられなかった。永楽帝（三代）がなくなったときは三十人以上が殉葬された。死の当日、宴席を設けて歓待し宴が終わると、妃嬪たちは宦官に導かれて堂の中に入り、殺されるときは泣き声が周囲に聞こえて楼閣が振動したという。殉死した妃嬪を出した家は、父兄に錦衣衛千戸の官職を授け世襲させた。この殉死は英宗（六代）まで続いた。

「中国四千年歴代王朝秘史新人物往来社」

日本においても宮女ではないが、殉死は多く行われていた。例えば奥州の伊達政宗が七十歳で死んだとき、家臣二十人が殉死している。明治天皇が、糖尿病の悪化が原因で六十一歳で崩御したとき、乃木希典大將が自宅で、婦人とともに殉死（短刀による自決）している。乃木は六十三歳であった。